

大槻玄澤に関する二三の考察

杉 本 つ と む

はじめに

早大図書館には、周知のように、洋学関係の資料が多い。中でも大槻家関係のもので、貴重なものがいろいろと蔵されているようである。ところで、目下の私の研究分野は初期蘭学の成立を究明することにかかっているのであるが、外の蘭学資料を探訪して得た結果は、一そう早大所蔵本の価値高いことを知るのである。とはいえ、たとえば「官途要録」や「載書（入門帳）」など既に、研究者が資料として活用しているから、早大にはいる前に、かなり利用されていたことも事実である。「載書」を明治二十年代に刊行の医学雑誌に、全部翻刻されているのを知って、驚いた経験もある。まだ江戸からそう隔たつてはいない明治初年には、蘭学資料も多く、医学や科学系統の雑誌などには、時々活字化されたのであろう。——これから私の紹介考察するものも、ある意味では新資料どころか、見ふるされ、使いふるされたもので、決してこと新しいものではない。しかし発見などというものは、コロンブスの卵の卵のようなものであり、丸い卵を切りようで四角に切ってみせる——いわば視点の相違、扱い方の違いで無限の価値を発揮してくれるものでもあろう。ここにつづる小論もいわば、ふと見出したごく些細なことであ

る。ただ日頃の私の疑問をかなり明確に解いてくれるのと、どうもまだどなたも論じておられぬようなので、貴重な紙面をさいただくことにした。

一

晩港漫録
と玄澤

「早稲田大学図書館月報」の No. 18・19 の二号にわたり、〈稀書抄録〉として、大槻玄澤の「晩港漫録」が紹介されている。これは、一九五三年十二月と翌年一月になるわけで、かれこれ十五年も前になる。紹介者は岡村千曳先生で、先生の日頃の鋭い御考察が随所にひらめき、私どもにもきわめて有益な文字をつづっておられる。そこで先生は「晩港漫録」についてこう紹介されている。

これは天明初年より寛政五・六年までの間に見聞した異聞奇説の類を蒐録したもので、中にはあまり世間に知られてゐないと思はれる貴重な資料も含まれてゐる。それらを本月報に随時掲載して参考に供することとする。本書執筆の当時玄澤は現在の新橋に程近い三十間堀に住んでゐた。（中略）玄澤は「玉篇」により「晩」に三十歩又は三十畝の意あるを知り、この字を借用した。「堀」は元来穿の意であるのを俗に濫塹の意に誤用したものである。それ故之を「港」に改め、「三十間堀」を竊かに「晩港」と呼称したのである（後略、由来については、玄澤自身が説明している。岡村先生はそれをやさしくかえられたわけである）。

「晩港漫録」は岡村千曳先生の紹介文をもって、代えさせていただいたが、先生の言われるように〈貴重な資料〉が

あるようである。おそらく、岡村千曳先生は御覧になられ、やがて発表されるはずの資料も多かったであろうが、残念ながら、永眠されて、後に残ったものには、何の遺稿も示されていないようである。

私はこの「畹港漫録」を再び、はじめから見る機会を得た。というのは寛政前後は玄澤及び玄澤関係の資料を考える上に、きわめて貴重な時期であるからである。早大以外の資料をもつて、推定すれば、玄澤にとって、内外ともに静かならざる時で、私は仮に、この時を玄澤にとって Strum und Drang の時代であると考えている。それだけに「畹港漫録」への興味は尽きない。その一つに「玄澤」の号に関する自己紹介の記述がある。すなわち抜萃してみる
とつぎのようなものである（同書上巻・一）。

（前略） 茂質八歳ノ時清菴先生名ヲ元節ト賜フ安永戊戌東都ノ鶴齋先生ノ門ニ入ル同庚子秋鶴齋先生イヘラク元節ノ名称呼ニ塞洩ス促ル玄澤ト改シヤト茂質謹テ命ヲ奉ケ且謝ノ曰玄澤ハ我先人壯年ノ称スル所ノ名仙城ノ玄潤先生命スル所ナリ故アツテ後玄良又玄梁ト改ム父ノ名ヲ襲ニアタル然レモ玄澤ノ字不佞小人ノ名トナスヘキノ文字ニアラズ唯郷里ノ近邑ニ黒澤ト云フ地アリコノ地名ト仮ニ通セシメテ私カニ号称ノ心ニモナサンカ高明ノ裁断ヲ希フトイ、ケレハ先生大ニ可ス因テコレヲ郷ノ清菴先生ニ謀リ先大人ニ白フス亦可セラレ則侯ニ達ス侯速ニ許シタマヒ郷国ニ大人ニ命シ給フ依テ再ヒ東都ノ余カ三又塾ニ告ラル本月廿五日ニ其書到ルコノ日ヨリ玄澤ト称ス。

十二月六日
先大人ヲ玄澤ト
松井積水^{玄潤}命名シタマフ説ハ別ニアリ

* 清庵は建部清庵で、江戸に来るまで、玄澤が師事していた先生。鶴齋先生は杉田玄白、侯は一ノ関の田村侯。

右は短い文章ながら、いろいろな問題をふくんでいる。その第一は、大槻玄澤の「玄澤」なる称号の由来に関して

である。例えば最近刊行された「日本古典文学大系」(岩波書店刊)の「蘭東事始」(校注 松村明)に、玄澤の名は玄白の玄と良澤の澤とをとりあわせたもの。(同書五〇五ページ)とされている。これはおそらく、緒方富雄氏の説——たとえば岩波文庫の「蘭字事始」で、大槻玄澤を解説して「玄澤」の名は、師玄白の玄と、良澤の澤とをとりあわせたものである。その人となり、その他については玄白の文にくわしい。(同書九六ページ)と解説されている——などによられたものであらう。そして従来、これがすなわち玄白×良澤↓玄澤と号したことが定説的になっているようである。確かに玄澤が玄白と良澤に師事したという点だけを平面的に考えると、きわめてあり得べきことである。しかし、余りにもうますぎてかえって疑問ももたれる。既に玄澤自身が語っているように、玄澤の父も玄(梁)の字をもち、その知人(先生)も玄(潤)の字を持っている。その他、玄白や良澤と直接関係のない医家で、玄の字を号に持つものは多い。それどころか、数年前、名古屋で、江戸時代の尾張医家姓名録を調べていたところ、何と！玄澤とか玄真という号をもった医家の姓名にぶつかった。もちろんいずれも大槻には関係なく、たまたま玄澤という号を持ったままで、偶然の一致にすぎなかったのである。一般に、江戸時代の医家ならば、玄々や斎などはありきたりの号であって、玄澤も特別異様なものではないのである。いわば玄の玄なるもので、医家としてごく一般的な号であるといつてよい。結論的に言うと、ここ数年、私にとって、玄澤の号の由来に関する従来の説は、多分に疑問とせざるを得ないと思推されていたのである。——こうした私の年来の疑問が、上述の短い記事で、それ相応の解答が与えられたと思われる。実は、玄澤の由来を従来の説と別のところに求めたいという私の考えは、他にもある。

それは玄白と良澤に玄澤が同じように師事したのではなく、彼の蘭学修業は、きわめていばらの道であって、玄澤自体も両師から熱愛されたり、囑望されたりする人物ではなかったらしいことがわかったからである。玄白にはいろ

いろの面で可愛がられたであろうが、しかし蘭字をどこまで大成するか、そう全面的に期待されたわけでもなさそうである。努力型の人物ではあったが、才氣煥発というのでもなく、かといって、何事もハイハイと師に従う好人物でもなかったようである。もつとも私にとつても玄澤像はまだ彫刻中であつて、決定的なことは言えない。ただ、簡単に玄白や良澤から一字ずつを取つて、号とするような人物——期待される弟子ではなかったようである。まして、玄白と良澤とに師事した仕方や、時期からして、簡単に玄と澤とを結びつけることはできないのである。それではどうして「玄澤」としたか。この疑問への解答が上の小記事である。

すなわち、杉田玄白から元節は言いにくいから玄澤としたらどうかと言われ、故郷の黒澤（黒は玄に通じるところから）に合致している点を考慮して、玄澤と名乗ることになったというわけである。ちょうど田舎から出てきた丁稚奉公が主人から名前が言いにくいので、久助とか久藏にしろと言われたようなものであろう。結果的には、父の玄澤を襲つたようにもなったと述べているのである（因みに、玄澤の子の茂楨玄幹も、玄澤と名乗つた）。号の「磐水」が「菅家磐井川上故以磐水為号」（古賀洞庵の磐水先生遺徳稿）とあるのと同じ趣向ということになる。ただここで問題になるのは、どうして玄白が、「玄澤」という呼称を与えようとしたかである（ここに玄白が、自分と良澤とを結び合せて考えたという推定が成立しないとも言えないが、しかし上掲短文中のごとく、玄白も故郷黒澤からの玄澤という称を認めている）。「元節」の呼びにくいということ——発音しにくいということ——はよくわかる。しかし玄澤という呼称を選んだ玄白の真意は故郷と医師であるということ以外やはり未詳というほかない。ある意味では、きわめて平凡な呼称、一般的なものとして、成長した弟子に、師である玄白が与えたもの——六蔵が六斎となり、八兵衛が八庵となるような——ではなかったか。玄澤が外科医として、一人前にならんとしたために、すなわち安永九年（二六〇）、二十四歳の元節に、玄白が玄

澤と名乗らせたのであろう。いわば医家にふさわしいものを選んだというわけである。おそらく、〈玄澤〉には辞書にあるような〈聖恩〉という意を目的に意識して与えたのではあるまいと思う。後に玄澤がそのような意義を感じたり、辞書を検することによって、意味づけをしようとしてはいるが、それは別のことである。

以上で第一の玄澤の由来に関する貴重な記述の紹介考察を終わる。今後これをもって、玄澤の由来と考えるのが妥当にしていると思う。年月日までではつきりと安永九年十二月六日よりと判明しているのである。なお「磐水存響」所収の年譜にも、安永九年に玄澤と改めた由を記述している。

第二に考えられるのは、〈茂質八歳ノ時清菴先生名ヲ元節ト賜フ〉という点である。たとえば「磐水存響」収載の〈磐水年譜〉（おそらく大槻如電翁の作製であろう）によると、八歳のところには何の記事もなく、〈明和六年己丑 十三歳 元節ト改名 同藩外科医建部清庵ノ門ニ入ル〉と見える。これは上で援用した遺徳碁でも〈年甫十三師建部清庵攻医方〉とある。その他富士川游氏「日本医学史^{決定版}」の略伝でも同様である。おそらく出所は一つであろうから、資料の数には関係なからう。その他私の手元に蒐め得た資料によっても、十三歳で清庵に入門したことは一致する。とするとこの清庵先生は別人かとも考えられるが、どうもそうではなさそうである。しかもはつきり元節と名を賜わったというのも、まちがいは考えにくい。ただ伯父に清慶というのがあるから、あるいは八歳でこの清慶について何らかの学問（素読的なものか）をしたのであろうか。それと清庵に入門した時とが混同したとも考えられる。しかし漫録の方は本人の書いたものであり、それ自身別に矛盾したところがあるわけではないから、いづれを正しいとするかは、むしろ今後の新資料発見をもって判定しなければなるまい。しかも清庵への入門とその関連、〈元節〉と名乗った時について再考すべきであって、今回は疑問の提示にとどめる。

蘭学階梯と
蘭学梯航

岡村千曳先生の御紹介記事は、さらに〈和蘭鏡序跋〉の発見という新資料の紹介へと展開していく。月報の No. 19 で詳述されているが、「晩港漫録」の紙背に、〈和蘭鏡序・跋〉のあるのを発見されたわけである。そこで岡村先生は、同跋文中の〈大蠟先生〉を大槻玄澤と考証され、序文の方は〈筆者の名を欠いてゐるが、その内容から見て玄澤の蘭学の師、前野良澤の文であらうかと推測される〉と述べておられる。「和蘭鏡」なるものが、天明三年（癸卯）にあったことはこのことで判明しているわけであるが、ただ、序文を前野良澤と推定されている点はすこし疑問がもたれる。というのは、天明三年という時点で、良澤と玄澤との関係をみると、序の文はいささか首をかしげねばならない。参考までにその部分を抜萃してみると、つぎのようになる。

余自少刻意于此書 既過領白 僅知其一二是一之難也 東奥大子煥 從學于余數年矣出藍之器 業已成矣 頃著和蘭鏡者 若同志之士 取而讀之 所謂曲釘鳩舌 誦口而解于心 而後讀和蘭 口授面語 如對鄉里之人 而後講其醫術 則其難也不難矣 亦能至其所至 尽其所尽矣 如此何啻醫 於他之技工 亦有所能通曉 而精妙奇巧出于己矣 是子煥所願也 余序之 以述子煥著書意矣

もし仮にこの序文が良澤であるとなると、彼の著書である「仁言私説」や「字学小成」などと近いころのものである

って、彼が語学的にも苦心している時期である。いわば「東奥大子煥、從學于余數年矣、出藍之器業已成矣」などと書きつづれる心境ではなく、まして玄澤の学習歴からすれば、完成した実力の時代ではないといふことができる。良澤が自分自身に対してもオランダ語学習の「業已成矣」などと表現できなかったであらうし、ましてまだまだ入口にいる玄澤に対して、良澤という人間の性格や態度からしても、「業已成矣」などと大それたことは書きつづれなかったであらう。

また「從學于余數年矣」も、すこし疑問がもたれる。磐水年譜では「安永八年己亥 二十三 前野良澤ノ教ヲ受ケ又朽木侯ノ家ニ出入ス」とあるが、良澤に實質的に学んだのは、天明三年まででまだ二年ほどであらうから、上のこととは多分に形式的儀礼的と考えられよう。良澤という学究肌のしかもきわめてジミな人物が、序文のような評語をつづるとは考えにくいのではなからうか。逆に皮肉って表現することも考えられるが、それは書くところとことによるのであって、この場合そうした遊びの態度は許されまい。そこでこれはむしろ杉田玄白であり、彼こそこの序文の筆者ではなかったかと思う。玄白と玄澤の関係、玄白という人物、蘭学々習の期間などなどから、玄白とする方が妥当に思われる。玄白には前後七、八年も師事し、病氣になれば玄白の居で養い、長崎から帰っても、鞋をそこにぬいでいる。もっともこれは私の推量であつて、他日、玄澤と良澤との交渉などを解明してより確定的なことを示したいと念じている。ただし、岡村千曳先生の発見紹介された「和蘭鏡序跋」は、多くの点で貴重な資料であり、認識をあらたにしなければならないと思う。浅学ながら、この機に一そう強調しておきたいと思う。実は、これ以外にまたさらに疑問に思われるところが、同じく紙背から読みとれたので、紹介したい。岡村千曳先生の発見されたところとは別のところながら、おそらく先生はこれもお気づきではなかったか。

その新しい資料というのは、「畹港漫錄」に筆料として用いている反古紙につづられたつぎの記述である。

(a) 鳩谷愚公孔平子序題蘭学梯航首

さらにつづく〈凡例〉中に、見えるつぎのことばである。

(b) (前略) 不才ヲ拙ラス蘭学梯航ナル者二卷ヲ著ノ其需ニ応ズ (後略)

かねて私の見つけていた〈蘭学梯航〉(以下梯航と略称) という名がここにはつきりと書かれているのである。私にとつては発見にも近い喜びであつた。(a)は現存の「蘭学階梯」と比較してみても題蘭学階梯首に相当する。さらにこの反古紙にのる鳩谷の序文と、階梯のそれを比較すると、殆ど一致する。具体的には「階梯」の〈故〉(序一ウ・二)が「梯航」で〈固〉、「階梯」の〈而修^ム欽^ム遵^ム之業^ヲ／以致^ス其編求野欽善之士^ニ (序三ウ・四、五)が、「梯航」で削除。「階梯」の〈頗^ル〉(同上・五)が「梯航」で〈稍^シミ〉、さらに「階梯」で〈欽^ム和彬^ニ蘭史^ヲ華野^ヲ邦其言実不^ニ誣^レ也^{ナラ} (序四オ・三)とあるのが「梯航」では欄外に書かれて本文からははずれている。序における両者の相違はないようであるが、〈頗^ル〉と〈稍^シミ〉では考えようによるとかなり異なるとも言えよう。いずれも修辭の問題として、処理できると思うが、つぎに大々的に異なるのは、〈例言〉である。

「階梯」の例言は八項目に分かれていて、「梯航」にある〈凡例〉という表示はない。その上あくまで反古紙に書きつづられているので、この「梯航」には「階梯」にある〈一羅旬語トハ…／一天下四大州…／一音釈ヲ為スニ…／一点例ノ篇中…〉の四項目が見あたらない。もちろん〈天明癸巳年〉という年次を示すものも見あたらない。以上の二点のほかに、「梯航」は〈例言〉が一項目で、「階梯」の例言を〈凡例〉として、表示している。しかもこの凡例の文章表現が、「階梯」の例言と一致するところとしないうところがあり、その上、凡例の表現文章も消されたり、朱で訂

正されているので、すこぶる混雜したものとなっている（この朱で添削の部分が、現存活字本の文章と一致している）。ただ全体的にみると、「階梯」の例言と「梯航」の例言及び凡例は一致すると結論してよい。いわば「梯航」の文章記述は、草稿の草稿という観がする。もつとも上で(b)として示したように、「梯航」の凡例の中には「蘭学梯航」という見すげぬ文字のある点など注意しなければならない。

「蘭学梯航」という名に近いものが、大槻玄澤の著書の中に見られる。すなわち「蘭訳梯航」である。これは「磬水存響」に収録されているから、広く一般に知られているもので、「蘭学事始」を補う有力資料である。しかし率直に言って、「蘭訳」の呼称はアイマイで明確さを欠く。ふつう英訳とか仏訳と言えば、英語とか仏語に翻訳したもの、またはすることを意味しよう。そう考えると、「蘭訳」は、蘭書翻訳の意であって、「蘭訳梯航」は文字どおり、「蘭書翻訳の手引き・案内」の意である。しかし「磬水存響」所収の「蘭訳梯航」は、蘭学の事始めを記したものであり、如何にして蘭学が起り、研究されていったかを記述してみせたものである。したがって、その意味では「蘭訳」に關係がない。むしろ現在の「蘭学階梯」こそ「蘭訳梯航」という呼称をもった方が妥当するとも言える。現在の「蘭学事始」は原名を「蘭東事始」と呼び、まさしくそれが内容的に、蘭学の成立史からは正しいと私考できるように、おそらく「蘭学階梯」も原名（初名）を「蘭学梯航」（または蘭訳梯航）と呼んだのではなからうか。そして現存の「蘭学階梯」は——單純に天明三年成立という通説を私はとらない——はじめ「蘭学梯航」と呼び、現存の「蘭学階梯」の乾（上）に記述してあるような内容と記述をもったものではあるまいか。すなわち、蘭語学のための手引きではなく、蘭学の手引きであつたというわけである。

ここまでくると、「蘭学階梯」の批判になるので、それは割愛しよう。ただ同書上巻は〈総説第一 勸戒第九〉ま

で、蘭学のことであつて、蘭語学のことでない点、如何にオランダ語を学習すべきかは下巻に記述されている。おそらくこの上巻にあたる部分が（天明三年という時点で）〈蘭学梯航〉と呼ぶにふさわしいものとして成立はしていたかもしれない。下巻は大部分玄澤自身の研究ではなく、前野良澤のものであり、見返しに述べているように、〈専ら崎陽の訳司諸輩に伝ふる所に因つて其学ひかたを〉示したものである。天明三年には成立せず、彼の長崎遊学である天明五年以降、いわば天明八年刊が当然なのである。

「蘭学階梯」が〈蘭学梯航〉とあつても、それ自体実はそう重大な問題ではないかもしれない。しかしここに玄澤の学問態度の一端が示されているし、現存の「蘭学階梯」の始源的呼称と内容、さらに「蘭学事始」と「蘭東事始」などを考える時にも参考になる。書名の変更改名の意味と玄澤という人物、さらに現存の諸著作とその書名との関連などである。また〈蘭学〉と〈蘭訳〉という用語の意味が現在と違つていることも知らせてくれる。すなわち、蘭学が狭義の(a)蘭学と(b)蘭訳に分化してゆくこと。(a)は原書オランダ語と直接関係ある点が大切であり、(b)は必ずしもそうでなく、翻訳されたものについて学んでゆく時が考えられる。もっともこれは玄澤自身における用語の使い分けとも言えよう。

「蘭学階梯」のもとが「蘭学梯航」であり、さらに「蘭訳梯航」という類似名の著書のあることを指摘したが、それどころか実は大槻玄澤以外の人物のものに、まさしく「蘭学梯航」という著述をもつ人物がいるのである。すなわちかの有名な語学の俊才、馬場佐十郎である。彼の墓誌銘をみると、その著として〈蘭学梯航六卷〉がある。近刊の拙著^{註(1)}で指摘しておいたように、馬場と大槻のものは書名著作で類似のものがあつて、現存の「蘭訳梯航」と馬場の「蘭学梯航」と関係あるかと疑問を提示したばかりであつた。ここでもう一つ疑問点が出てきたわけである。もし以上記述の

諸点を総合すると、おそらく馬場の「蘭学梯航」は語学学習書で、他に馬場の数々ある語学研究書と同類のもので、玄澤もそれを意識して「蘭学梯航」の名をやめて「蘭訳梯航」と改称したのではなかったかと疑われる。しかし、玄澤は馬場より三十年も年上であり、玄澤が長崎遊学の時には、馬場はまだ生まれていない。いわば玄澤が「蘭学梯航」を執筆し、人に示した頃に、馬場は生まれておらず、したがって馬場の「蘭学梯航」は存在しないことになる。したがって「蘭学梯航」から「蘭学階梯」への改称は、玄澤自身の問題であつたろう。そしてもしも岡村千曳先生の言われるように「和蘭鏡」が「蘭学階梯」と深い関係があるとする御考えを加えると、ここに三つの作品がからまつてきて、一そう玄澤、及びその著述を考える上に慎重にならざるを得ないのである。

それにしても、馬場が文化五年に江戸にきて、玄澤らに与えた語学々習上の影響はすこぶる大きく、とうてい両者の間に年齢的に三十年の隔たりがあるとは思えぬ。語学の実力において玄澤が馬場に宛をぬいているのは真である。そこでやはり馬場の「蘭学梯航」と玄澤の「晩港漫録」にたまたま見られた「蘭学梯航」との偶然の一致は何かを暗示しているように思われる。結論的に言うと、「蘭学梯航」の名称は、「蘭学階梯」と深い関係があり、さらに後年になって、玄澤の「蘭訳梯航」、馬場の「蘭学梯航」とも関連があろうとかと推定できるのである。^{註2)}

三

「晩港漫録」とともに、「磐水先生随筆」もまた、きわめて貴重な資料に富んでいる。その一つに「芝蘭堂」と玄澤の関係を考えさせるものがある。それは、玄澤の長崎遊学鹿島立ちの時のつぎの記録である。

芝蘭堂と三
又塾と玄澤

○瓊浦紀行 將遊瓊浦偶題 芝蘭堂主人

曾抱千秋医国業將酬万里航海心

亞大臘山歌送大槻杉田二君遊長崎 前野達

(詩文略、以下諸家のものも省略、卷之三)

周知のように玄澤の長崎遊学は天明五年で、十月に江戸を発している。その出発時に、師や朋友が送別のことばを贈ったわけで、上掲のものは、〈卷之三〉の冒頭にある最初のことばである。ことばを寄せている人びとは杉田翼、中川鼎、朽木春世などいずれも親しい人たちである。ここで問題になるのは、一番はじめに出ている〈芝蘭堂主人〉の文字である。第二番目に前野達が出ているが、これはいうまでもなく前野良澤の長男である良庵のことである。しかし全体を見まわしても、蘭語学の師とも言うべき前野良澤の名がみえない。時に良澤は六十二歳と思われるが、特に病氣とか江戸を離れていたということを知らない。それどころか、前野達より先に、第一番目にことばを贈るべきは、玄白か良澤かのどちらかではあるまいか。そして、このころの玄澤の状況から推量すると、まず玄白以外では、前野良澤ということになりはしまいか。すなわち、最初に〈芝蘭堂主人〉の名で出ている〈芝蘭堂〉は従来のように大槻玄澤の塾と考えてよいかどうか。むしろ玄白や良澤かのどちらかが芝蘭堂を経営し、その主人である者が〈芝蘭堂主人〉の名で、第一に送別の辞を送っているのではなからうか。この推定の是非は、今後さらに究明されていくべきかと思うが、諸家の送別の辞につぐ記事に「十月七日 曉発 三又塾快晴 同行令郎伯元及僕伊三湘中ノ為ナリ(後略)」が読める。この〈三又塾〉は、はじめに引用した「晩港漫録」にも、〈東都ノ余カ三又塾ニ告ラル〉とあった。そこでははつきり余カ三又塾とあるから、玄澤の塾を三又塾と呼んでいたのであろう。天明五年十月七日に出発した

三又塾も、同一と考えられよう。

安永九年といえは、玄澤が玄白の門にはいつて、二年ほどであり、まだ良澤にはついておらず、おそらく蘭学も未しの時であつたらう。それなのに既に、三又塾という塾をもつていたこと、しかもそれが、天明五年においても存在していることが判明する。《三又塾》の由来はついにくわしくしないが、塾の場所が三つ又になっているところというような、地形から得た命名にすぎなからう。^{註(3)}ただ彼の人物、才能を考える上にこの塾の経営は、注意しておいてよい。蘭学でなくて、主として外科を教えていたのだろうか。

「晩港漫録」には、はじめに《庚戌晩秋 芝蘭堂識》とあつて、すでに玄澤と芝蘭堂とが結びついている。この庚戌は、寛政二年（七五〇）にあたるとも寛政己酉付の「載書」に《芝蘭堂入学盟規》があるように《磐水年譜》にでているが、原本をみたところでは芝蘭堂の文字はなく、《寛政元年竜次己酉夏六月初吉僊台侍医大槻茂質玄澤識》とあるだけである。ただし《磐水年譜》の《天明六年丙午》の条によるとつぎのようにみえる。

◇三十歳 五月長崎ヨリ江戸ニ帰ル

五月本藩仙台候医員ニ準ラル食禄一百廿五石江戸居住始メ京橋一丁目八月本材木町ニ移ル学堂ヲ芝蘭堂ト号ス
（他の記事略）

すなわち、天明六年八月に《芝蘭堂》と号したことが知られる。これはどういう資料によられたか明示されていないので根拠を確定することができない。しかし私にわかる範囲では、天明五年（七五五）十月という時点で、ある資料（上掲）では、《芝蘭堂主人》と記するものがあり、さらに天明六年八月、あるいは寛政二年（七五〇）には、芝蘭堂主人が玄澤になっているということである。《磐水年譜》から推しても、天明五年、長崎遊学の際の芝蘭堂が、玄澤のもの

でなく、したがってその主人が、大槻玄澤でないことは確定できると思う。

まして従来、大槻玄澤の蘭学塾と考えられていた《芝蘭堂》が、すくなくとも天明五年十月までは、玄澤というより、むしろ師（または保護者）にあたる人の塾名であったのではないかという推定が小論の資料で明確になろう。この《芝蘭堂》がやがて、玄澤の塾名となり、玄澤の塾は、《三叉塾》から《芝蘭堂》に移ったと思われる。——以上のことが判明する。いずれも天明六年（寛政二年の約五年間が、この辺の事情を解明するに大切な時期であることがわかる。寛政己酉（元年）の「載書」に芝蘭堂とないところは、おそらく、寛政二年前後に、《芝蘭堂》を襲ったことになりはしまいか。杉田玄白五十八歳の時である。

以上、《芝蘭堂》が、玄澤の塾名でなく、師（おそらく杉田玄白か前野良澤を擬することができようか）のそれであろうと推定した。しかしもう一度随筆にもどって考えてみよう。すなわち《曾抱千秋医国業将酬万里航海心》は、その題に《将遊瓊浦偶題》とあって、芝蘭堂主人自身の感慨をつづっていると思われ、芝蘭堂主人を玄白・良澤と考えるとしても、詩断片は、玄澤の立場になって作っていると考えるか、もしそうでなければ、玄澤自身と考えねばなるまい。《将遊瓊浦偶題》は、その表現から考えると、玄白や良澤であるより玄澤の決意を表示したと考えるのが普通であろう。——とすると芝蘭堂主人は大槻玄澤と同一人物となって、従来の説と矛盾しない。いわば《芝蘭堂》は玄澤の書齋（室）の号であり、《三叉塾》は文字どおり塾名であった、ということができる。しかし、そうすると前野良澤の送別の辞はないこととなり、別の意味で、玄澤と良澤とのそのころの関係を考える一材料となろうし、また《芝蘭堂主人》からは、杉田玄白が玄澤の立場に立って作詩したとも考えられる。そうでなければ、三叉塾から芝蘭堂への移行が、長崎遊学前（天明五年十月前）に既に確定していたこととし、主人は玄澤自身と想定しなければならない。こ

れは上述のように明らかに矛盾するのである。私は、〈芝蘭堂主人〉を前野良澤か杉田玄白に擬しておきたいと思う。
《磐水年譜》には、三叉塾のことがふれられていないし、芝蘭堂についても特に疑点を示されていないようである。^{註(4)}
玄澤のことは、まだまだわからぬことが多い。その解明の一つの方法は「官途要録」を精読することであろう。これについては他日紹介考察してみたい。ただついでもってノートしておけば、小論で論じた点については、ついに同書でも解答を見出すことができないようである。

四

玄澤と狂歌・戯文

最後にこの長崎遊学と関連して玄澤の別の一面を示す記録をあげておきたい。それは明治二十五年二月発行の「中外医事新報二八六号」の〈伝記 ◎大槻磐水先生〉(ちゅうしやま)にみえる評語と関連して言えることでもある。すなわち同伝記の一部に、〈先生空詩浮文ヲ喜ハズ然レモ春花秋月興ニ乗シテ吟咏セラレタルモノヲ見ルニ韻度ノ超逸天資ノ風流ヲ想知スルニ足ル(後略)〉とある点である。しかし、長崎遊学にあたって「磐水先生随筆」につぎのようなものがあるのはいかがであらうか。

(A)

はるかに丸山寄合所を思ひ侍りつ

行く人は恋の淵瀬にはまる山唐も大和も寄合の里

唐大和いしやうにめててより合のいろにうかるゝ恋の丸山 種成

(B)

尊師の厚恩今に始め事なからわけて今度の旅出始め終りの心つくし謝するに所なし

師の恩のあつし小春の旅衣 嘯風旅人

社中の人々へ

浦風はへだてゝちかし友衛 同

(A)と(B)と比較すれば、かなり態度内容が異なっている。そして(A)にみられる狂歌は如何であろうか。玄澤の長崎遊学は、いうまでもなく、広義の蘭学修業であつたろう。であるから上掲の詩断片のように悲壮な覚悟のもとに江戸を出発しようとしたわけでもある。しかしまだ長崎に行かぬ先に、浮文ともいうべき長崎遊里の丸山を狂歌に詠んでいるというのは、いささか従来(の)玄澤像を修正させる資とならう。俳句の方は〈尊師〉で杉田玄白を、〈社中〉で、三又塾をさしていると思われる。さらに〈種成〉という名は別に、つぎのような戯文の作者名〈花篠種成〉としても登場している。

(C) 男子生(うこ)きて四方の志有りと聞たれハ一とゝせ思ひ立西遊し侍らんと志し坊主あたまを毬栗と変しけふ立んあす立んと思へとも何くれとさわりいできて旅は立のびうば玉の黒髪こそ旅立のひたり一筋の海道千里の独行大道直ふして髪かみの如しといひしも道には髪かみの縁もあり神の恵みに願ふ事叶ん時の至りとや漸や／＼こたひ思ひ立ことゝはなりぬ一時の別れハ悲しけれと程なく春はかへさの旅路もとのくり／＼あたまにするめままて来る身と社中の人々へ 花篠種成かいふ

立のびし髪は道より長崎えついゆひつきて帰るくる／＼

一読してわかるように、戯文、たいして才のひらめいたものでもなく、駄文というにふさわしい。へうば玉の黒髪こ

そ旅立のひたり／道には髪縁もあり神の恵みに……」など掛け詞というには、あまりにも稚拙である。ましてハナエダ（花篠）タネシゲ（タネナリ・種成）とハナゝタネとはいかにも田舎者の都会かぶれで作った駄洒落的狂名である。まだ俳句の方がみるべきものありと云うことができるか。《嘯風旅人》は別にただ《嘯風》と呼び、《嘯風雅伯》とも称したらしい。嘯はウソであり、風は吹クに通じるから、大法螺吹きの玄澤先生という自嘲からでもあろうか…。

以上で玄澤には狂名の《花篠種成》、俳名《嘯風・嘯風旅人・嘯風雅伯》のあったことが判明した。おそらく、明治以来、いや杉田玄白の「蘭学事始」以来、玄澤は余りにも過大評価されたし、部分的な面が強調されすぎてしまっていると思う。ここで私の紹介考察した小文によって、よし玄澤が浮文戯文をものし、丸山遊興を夢見る青年であることが判然としても、別に彼の学者としての力量や人格にきずがつくわけでもなからう。むしろ人間玄澤の一面——一ノ関・仙台という東奥の田舎出の一青年が、保証された家柄も才能もなくして、ついに花の都で、新しい学問に志し、一家を構え花咲き実成ろうとするの時、さらに異国情緒溢れる崎陽への遊学を志し、しかも実現するという——彼の戯文にみられる人間玄澤の自画像は、まさしく彼自身を雄弁に語る貴重な資料と言つてよからう。見ぬ先に夢見ている丸山のさんざめきは、やがて玄澤の崎陽での楽しい毎日の生活を暗示しているとも言えそうである。筆をおくにあたり、「蘭学事始」の一節を引用しておく（緒方富雄校注・岩波文庫本による）。

その「東奥の建部氏」門人大槻玄澤といふ男をさし登せて同じくわが門に入れたり。この男の天性を見るに、凡そ物を学ぶこと、実地を踏まざればなすことなく、心に徹底せざることは筆舌に上せず。一体豪気は薄けれども、すべて浮きたることを好まず。和蘭の窮理学には生れ得たる才ある人なり。

はじめに述べたように、故岡村千曳先生は、ここで私のとりあげた資料を御覧になっておられ、論ずるところもあったと思われる。最近拙著にも書かせていただいたが、小生遊学中に先生が昇天され、ついにいろいろとおきぎすることのできなかったことが残念至極である。私の考察の浅く独りよがりのところを先生の霊も苦笑されているであらう。しかしここで紹介したのは、私にとっては新資料であり、多くの研究者にとっても、未見未紹介の資料となっている面があろう。あえて本紀要を拝借して、日ごろの研究の余滴をつづらせていただいたゆえんである。諸兄姉の御批判、御教示を切に願っておきます。

末筆ながら、早大図書館特別資料室、洋学資料整理の諸兄姉には何くれとお世話になった。特に服部、松本両氏には厚く御礼申しあげる。また羽間文庫、羽間平三郎、同奥様に心から厚く御礼申しあげ、小論をもって御厚志にお答えしたい。

註

(1) 「近代日本語の新研究」(桜楓社刊)所収「語学の俊才・馬場佐十郎その人と学問」を参照。

(2) この初校ゲラが出る一か月ほど前、馬場佐十郎の「蘭学梯航」を二本、やっと見ることができた。それによって、同書の全貌や馬場の蘭語学も解明できる。これについては、近く発行する論文集「近世中期文学の諸問題Ⅲ」(共同執筆)に、詳述した。その方を参照されたい。

(3) 「江戸名所図会」の「三派」(みづな)に「新大橋の下、分流の所を云ふ。浅草川と箱崎の間の流れとの分れ流るゝ所なればなり」として「三又江泛舟」と題する春台の詩をのせている。玄澤の「三又塾」という名称も、この「三派」という地名と関係があるろう。

(4) その後はからずも、大阪羽間文庫で「芝蘭堂留塾漫録完」(見返し「芝蘭堂留塾漫録抜萃」)を拝見する機を得た。本書の開巻第一ページに「杉田玄白編選／塾生大槻茂質元節輯」とあった。まさしく杉田玄白の塾が「芝蘭堂」であり、その塾生が大槻茂質元節、すなわち玄澤であったのである。ただ本写本も年月日の記入がない。しかし「元節」とあるところから、逆に本書が、安永九年以前とも考えられよう。しかしこれについては、まだ同書の内容から疑点があるので、他日を期したい。